

アンケート調査からわかる 現代北京語の一側面

渡 部 洋

1.0 はじめに

拙論は大谷大学真宗総合研究所 2013 年度の一般研究班の研究活動の中で行った北京・上海での北京語に関するアンケート調査の結果に対し考察したものである。今回のアンケート調査の目的は清朝時代から脈々と続いてきた北京語が現代ではどのような状況なのかを知ることにある。特に標準語の影響がどの程度まで進んでいるのかを少しでも明らかにしたいと考えた。太田辰夫氏は「北京語の文法特點」（以後「特點」と略す）の中で北京語、或いは北方語と南京官話との違いを明らかにされている²。その論文に使用された資料からするとその違いは今から約 100 年前のものであるが、筆者は 80 年代あたりまでそれが大きく変わらなかったと考えている。しかし、80 年代以後の経済の発展に伴い、人の移動も活発になり、なお且つテレビやインターネットで気軽に北京語が聞けるようになった。そうした社会状況の中で学校の徹底した標準語教育は標準語の普及を驚異的なスピードで加速させることとなったようである。太田氏は「特點」（244 頁）の中で“もっとも北方語（北京語）といい南京官話といってもその實態はあまり正確に記述されているわけではないから、推定の域を出ない点があることをまぬがれないし、ことに民国以後の共通語の普及は両者をいよいよ区別できないものになっている。”と共通語の普及という問題を指摘している。共通語とは標準語のことであるが、80 年代後は上記で述べた社会状況の変化と標準語教育の効果によりその普及の程度が民国期以上に進んでいて北方語と標準語をより区別しにくいものになっているに違いない。また、筆者は 80 年代北京に留学していたが、地方に行くと標準語が話せない年配の人をよく見かけた。また、北京大学では標準語が話せない理由から板書で授業をする先生もいた。今はそのような状況は皆無であろうと思うが、80 年代以後の急速な標準語の普及は北京語にも少なからぬ影響を与えていると考えられる。た

だ、その実態は今だ不透明である。そうした実態を解明するために今回このアンケート調査を実施したのだが、小規模な調査であるためある種リトマス試験紙の役割を果たすものと考えている。

この調査は2回に分けて行った。一回目は2013年の8月21日と22日二日間上海の中心地にある錦江ホテル近くのスターバックスで調査を行い、その後北京に移動し、24日と25日に北京の中心地にある西単のスターバックスと街頭でアンケート調査を行った。上海での調査は順調で少ない日数で上海人（上海で生まれ育った人を指す）のアンケートを多く集めることができた。北京の西単は元々北京居住の中国人が買いものに行くところであり、人通りも多く、主に北京人（北京で生まれ育った人を指す）が多く行く場所と聞いていたが、しかし、実際アンケートを行うと地方出身者が多く、なかなか北京人に会うことがなかった。そのため北京人へのアンケートは予想していた数を集めることができなかった。二回目は予備調査として2014年2月19日と20日に北京市の郊外にある梨園駅前のスターバックスで行った。梨園駅是北京の中心地にある崇文門から地下鉄と電車で約1時間かかるところにある。ここでは多くの北京人からアンケートを集めることができた。恐らく北京の中心地に住んでいた北京人はほとんど郊外に住むようになり、地方出身者が北京の中心地に住むようになったと考えられる。いつからこのような状況になったのかわからないが、これまで得た情報から推測すると90年代以後、特に北京オリンピック前後あたりから形成されていったのではないかと思う。

今回、色々な地域の出身者からもアンケートを集めることができた。各地域の言語状況を知る上で興味深いこともわかるかもしれないが、ここでは北京人へのアンケート調査の結果を南方方言地域に住む上海人の調査結果と比較しながら述べていきたいと思う。

尚、このアンケート調査において北京人であるか否かは調査の際に口頭で確認している。複数の中国人に確認をとったことであるが、“北京人である”と答えた場合、親も北京人であるとのことである。また、アンケートの回答者についての情報は少ないかもしれないが、突然現地の人に時間をとっていただいておりますものなので、できるだけ簡素で時間の取らないものにした。

2.0 アンケートについて

アンケートは故郷の地名と年齢幅をA（20歳～29歳）、B（30歳～39歳）、C（40歳～49歳）、D（50歳～59歳）に分け、それぞれ該当する年齢幅に印をつけてもらうことにした。アンケートの質問事項は10問用意し、各項目の中国語文の（ ）に入れるのに適当と思う語句をいくつかの選択肢から選んでもらうというものである。選択肢として中国語文の下に並べた語句は同義語或いは類似の意味を表したものである。また、選択肢の中に回答者が自由に書ける項目も用意しておいた。

アンケートをお願いする時には、できるだけ普段使っているものを選んで答えてもらうようにし、このアンケートの目的やその他回答者が疑問に思う質問にはその場でできるだけ丁寧の説明した。アンケートに回答した北京人は全部で44名、上記の年齢幅で分けると20代が18名、30代が12名、40代が8名、50代が3名、60歳以上が2名、20歳以下が1名である。上海人は全部で35名、年齢幅で分けると20代が15名、30代が11名、40代が4名、50代が2名、20歳以下が3名である。次にアンケートの各質問内容とその結果に対する考察を行う。

2.1 <別>について

<別>は禁止を表す副詞である。この語彙についての質問には下記のような中国語文とA、B、C三つの選択肢を用意した。

1. 我跟你说呀，你把那那俩啊，肉包子给她留着，你（ ）吃呀！

A 别 B 不要 C（ ）

北京人へのアンケートでは44名中、38名がA、2名がB、4名がCを選んだ。Cを選んだ4名の内3名が<甬>と書き入れ1名が何も書き入れなかった。選択肢AとBどちらも副詞で禁止を表す。「特點」（264頁）によれば<別>は北方語で、南京官話では<莫>を使うとある。北京人の多くがAの<別>を選択している。北京人が<別>を用いる状況はどうやら清朝から変わっていないようである。ただ、標準語の影響かもしれないが、2名がBを選んでいる。<甬>も

北京語で禁止の意味を表せるのでこれを（ ）に入れても文の意味はほぼ同じである。《不要》を選んだ人が2名いたが、20代1名と30代1名である。40歳より上の人とはみな《別》を選択している。この世代の人たちは80年代前に生まれた人たちなので《不要》を用いるのに20代や30代の人たちよりも違和感を強く感じるのかも知れない。上海人の調査結果は35名中Aが16名、Bが18名、Cの（ ）に《表》と書いた人が1名いた。《表》は上海語で《不要》のことである。ただ、北京人ほどではないが、Aを選択した上海人も少なくない。このことから《別》が北方語という特徴は薄れつつあるのかも知れない。言い換えれば、《別》の標準語化が進みつつあると言える。また、《甬》を書き入れる上海人は一人もいなかった。この語彙は今も北京語としての特色を保持しているようである。

2.2 《給》について

ここでの《給》は介詞で“～に”、“～のために”等の意である。これについては下記の中国語文とA、B、C、Dの選択肢を用意した。

2. 她爱喝牛奶, 我()她买了很多牛奶。

A 帮 B 给 C 替 D()

北京人へのアンケートでは44名中4名がAを選び、35名がB、5名がCであった。上海人は35名中21名がAを選び、12名がB、2名がCであった。「特點」(259頁)には“南京官話では《給》を用いず、《替》や《和》を用いた”とある。また、《帮》も上海や台湾等の南方地域で介詞としてよく用いられる。40代以上は1名を除きみな《給》を選んでいて40代よりも若い世代でAやCを選ぶ人が出てきている。Bの《給》はもともと北京語であることから北京人の多くがこれを選ぶのは当然であるが、Bを選んだ上海人も少なくない。北京、上海にかかわらず広く一般に《給》は標準語として認知されているようなので《給》の標準語化はかなり進んでいると言える。今、北京で《給》を北京語と認知している人は少ないのではないかと思う。

2.3 《人》について

ここでの《人》は《人家》の意で第三者を表す。これについては下記の中国語文とA、B、Cの選択肢を用意した。

凭什么()董建业同志敲门,您就不敲啊!

A 人家 B 人 C()

北京人へのアンケートで44名中33名がAを選び、10名がB、1名がCを選んだ。そしてCを選んだ人は()に何も書き入れなかった。《人》や《人家》は“他人”、“別の人”、“第三者”等の意味で用いられる。ここでは日本語の“あの”、“あの”等に当たる言葉である。この中国語文はドラマ「裸婚時代」の中で北京人の娘が話す台詞である³。日本で中国語を教えている上海人の先生から南方では《人》ではなく《人家》を使うと聞いていたので確かめてみようと思ってこの質問を考えた。結果是北京人の多くは《人家》を選んだ。上海人は35名中、28名がAを選び、3名がB、4名がCを選んだ。そしてCを選んだ人は()に何も書き入れていない。ただ、意味上()に何も入れなくても文としては成り立つのでCを選んでも不思議ではない。アンケート結果だけで《人》が北方語かどうか見分けをつけるのは難しいが、《人》を選択した者の数だけを比較すると北京人のほうが多いようである。ただ、北京人と上海人の両方で《人》を選んでいる人は20代、30代に多いので世代の違いが関係しているのかもしれない。

2.4 《来着》について

《来着》は過去の追憶を表す助詞である。これについては下記の二つの中国語文とA、B、C、Dの選択肢を用意した。ここで二つの文を用意した理由は質問の意図とまったく関係のない句末助詞がDの()に書き入れられないようにするためである。

4. 你说什么()?

你当年爱看的那个电视剧叫什么()?

A 来着 B 了 C 不填空 D()

北京人へのアンケートは44名中40名がA、1名がB、2名がC、1名がDを選び()に《玩意》と書いてあった。CとDを選んだ人はごく少数でこの質問の意味を十分理解していなかったかもしれない。多く北京人が選んだ《来着》については「特點」(264頁)に““来着”は過去の追憶をあらわす。北京語に用い、南京官話で“来”といい、さらに助詞“的”または“呢”をつけることもある”とあり、上記の結果は現代もこの語彙が北京語の特徴を有したものであることを裏付けるものになるかも知れないが、しかし、上海人の調査結果は意外なものであった。上海人の35名中22名がAを選び、1名がB、8名がC、4名がDを選んだ。この結果から多くの上海人も《来着》をよく用いることがわかった。そして《来着》を選んだ人の内20名の上海人が30代から若い年齢層の人たちである。これは80年代ごろからの標準語教育の効果の表れかもしれない。日本の国語辞典に当たる中国の『現代汉语词典』の初版に《来着》の項目での説明において方言についてまったく触れておらず、呂叔湘氏の『現代汉语八百词』の中でもこの語彙について方言に関しての説明はない⁴。このことから早くから《来着》を方言の語彙として扱わず、標準語として扱っていたことがわかる。この《来着》を上海人が用いるようになったことは中国の国語教育の中で早くから標準語の語彙として扱われ、それが浸透した結果と思われる。《来着》の標準語化は80年代以前に比べかなり進んでいるようである。

2.5 《这么着》について

《这么着》は指示詞で“このような”の意である。これについては下記の中国語文とA、B、Cの選択肢を用意した。

5. 既然(), 我就不去了。

A 这么着的话 B 这样的话 C()

北京人44名中23名がAを選び、15名がB、6名がCを選んだ。Cを選択した人の4名が()に《这样》と書き入れた。他の2名はそれぞれ《如此》、《这么说》等を書き入れていた。「特點」(250頁)には““這麼”“那麼”を副詞的修飾語として用いるものは南京官話にもないとはいえないようであるが、

おおくは“這樣”“那樣”という。・[省略]・“這麼着”“那麼着”といって”“このようである”“そのようにする”などの意の述詞として用いることも南京官話にはなく、また“そこで”の意味の連詞とすることも南京官話にはない。”とある。このことからAの《这么着》を多くの北京人が選んだことは当然であるが、《这样》と書き入れた4名をBの15名に加えると19名になりAを選んだ数に近くなる。この結果からもともと南方で用いられていた《这样》が標準語として北京人も用いるようになったと考えられる。なぜなら40代より上の北京人では《如此》と書き入れた1名以外はみなAを選択しているからである。上海人へのアンケートでは35名中3名がAを選び、32名がBを選んだ。この結果から北京と上海ではAとBがほぼ完全に逆転しており、北京語の《这么着》が今も北京語の特徴を有していると考えられる。ただ、Aを選んだ3名はいずれも20代なので今後は何らかの変化あるかも知れない。

2.6 《得很》について

《得很》は助詞《得》と副詞《很》が一緒になって程度補語になり、“大変～”の意を表す。これについては下記の中国語文とA、B、Cの選択肢を用意した。

6. 我开心得()。

A 不得了 B 很 C ()

北京人は44名中24名がAを選び、16名がB、3名がCである。Cを選択した人は()に《厉害》、《特别开心》、《特开心》、《像朵花一样》等を書き入れた。Cの4名は《开心》と《得很》の組み合わせがしっくりこなかったように思われる。「特點」(256頁)によれば《得很》はもともと南京官話で用いられたようである。ただ、北京でもよく耳にする言葉なので調査の項目に入れた。北京人の中で恐らく《得很》がもともと南京官話で用いられた南方の言い方であったと思う人は少なく、すでに標準語化され方言色を失ったものになっているようだ。《得很》についてのアンケートを回答してもらった上海人の35名中28名がAを選び、7名がB、Cを選ぶ人はいなかった。《得很》はもともと南方のものであったが清末以後、北京でも多用されるようになり、南北の差

異がなくなってしまったと考えられる。

2.7 《准》について

《准》は副詞で“必ず”、“きっと”等の意味を表す。これについては下記の中国語文とA、B、C、Dの選択肢を用意した。

7. 是他说的()没错。

A 肯定 B 准 C 绝对 D ()

この項目では北京人44名中9名がAを選び、27名がB、6名がC、2名がDを選び()に《应该》、《就》とそれぞれ書き入れている。そして上海人は35名中25名がAを選び、3名がB、4名がC、3名がDを選んだ。Dを選んだ人の2名は()に何も書き入れなかったが、1名が《应该》と書き入れた。北京人、上海人双方顕著に異なるのはBである。《准》を北京人は多用し、上海人はほとんど使わない。「特點」(262頁)に““準”を“たしかに”“きっと”の意の副詞に用いるのも北京語で南には正確に相当するものがないようである。”とある。《准》は今も南方地域に正確に相当するものがないので標準語化を避けることができ、現在も北京語の特徴を有していられるのかもしれない。ただ、上海人に3名《准》を選んだ人がいるが、その内1名が20代で、2名が30代である。どちらも80年代以後に生まれた人たちである。

2.8 《似的》について

《似的》はよく《像》と呼応して用いられ“～ようだ”の意で類似を表す。これについては下記の中国語文と選択肢を用意した。

8 就像进了天堂()。

A 似的 B 一般 C 一样 D ()

この項目では北京人44名中26名がAを選び、2名がB、15名がC、1名がDを選び、()に何も書き入れていなかった。上海人は35名中5名がAを選び、5名がB、25名がC、Dは0名であった。《似的》は北京人に用いる人が多く、逆に上海人に少ない。《似的》は今も北京語の特徴を有した語彙であるといえ

る。「特點」(264頁)に“類似をあらわす“似的(shi·de)”は南京官話では用いず“一般”“一樣”(簡体字は<一样>と書く)などという”とある。ただ、今ではその南京官話で用いた<一样>を用いる北京人も少なくない。推測ではあるが、<一样>は民国後標準語化されて北方でもよく用いるようになったのかもしれない。また、Aの《似的》を選んだ上海人は20代と30代で40代や50代の人にはCを選んだ。《似的》も80年代から標準語化が進みつつあると考えられる。

2.9 <什么的>について

<什么的>は<什么>と<的>とが一緒になって“～など”の意を表す。これについては下記の中国語文と選択肢を用意した。

9 他的书包里有课本, 笔记本()。

A 什么的 B 等等 C()

この項目では北京人44名中38名がAを選び、2名がB、4名がCを選んだ。そしてCを選択した人は()に<之类>、<啥啥>、<么>、<啥的>等を書き入れた。<之类>は文語的な言い方であり、<啥>は北方方言で<什么>の意である。<么>は<什么>の意を表す<嘛>と通じるので地域によっては用いるのかもしれない。上海人は35名中19名がAを選び、15名がB、1名がCを選び()に<啥>と書き入れた。「特點」(250頁)に“なお北京語では名詞のあとに“甚麼的”(簡体字では<什么的>と書く)をつけて“等”の意をあらわすが、これも南京官話に無い”とある。しかし、現在上海人にもその南京官話に無かった<什么的>を用いる人が少なくない。これは<什么的>の標準語化がかなり進んでいることを示している。

2.10 <咱>について

ここでの<咱>は第一人称複数の人称代名詞である。これについては下記の中国語文と選択肢を用意した。

10() 不说这个了, 换个话题把。

A 咱 B 我们 C ()

この項目では北京人は44名中40名がAを選び、3名がB、1名がCを選び、()に何も書き入れなかった。上海人は35名中8名がAを選び、23名がB、4名がCを選んだ。そしてCを選択した中の2名が()に《阿拉》を書き入れた。《阿拉》は上海語で標準語の《我们》に当たる。この結果は《咱》は北京人の使用度が圧倒的に高いことを示している。しかし、「特點」(249頁)に“河南山東など一部で用いられる一人称単数または複数が“俺”“咱”“俺”などは北京語では用いられない”とある。このことから清末或いは民国の時代に《咱》が北京語では用いられなかったが、このおよそ100年の内になんらかの原因でこの《咱》は北京人に用いられるようになったようである。また、上海人が8名も《咱》を選び、その8名が30代からの若い人たちであり、北京人においてもBの《我们》を選択した3名はいずれも20代である。このことから、現在は《咱》が北京語の特徴を有する語彙と言えるが、今後は《咱》の標準語化が進み、北京語としての特徴を失っていく可能性があるかも知れない。また、上海人へのアンケートでCを選び《咱们》と書いたものは見なかった。中国語文の()には包括式複数の人称代名詞《咱们》が入るべきだと思うが、排除式の《我们》を多数の人が選んでいる。これは標準語の中で《我们》が包括式複数にも用いる人が増えてきたことを示していると考えられる。

3.0 まとめ

今回のアンケート調査により北京語、或いは北方語とされていたいくつかの語句の使用状況を知ることができた。その状況はもともと方言色の濃かった語句が標準語と認知されて用いられようになってきているということである。太田氏も「特點」の中で民国後の標準語の普及により方言との区別が明確なものでなくなり始めていることを指摘している。今回の調査でも《別》、《给》、《什么的》、《来着》等の語句を用いる上海人が少なくないことがわかり、これらの語句は現代において方言色が薄くなっており、標準語化がかなり進んだ語句であるといえる。ただ、中国の現在の標準語はもともと北京語をベースに作られたものなのでこうした変化も当然のことなのかも知れない。特に教育機関での標準語教育、90年代から経済発展による人の移動の活発化、テレビ

やインターネットの普及等は言葉の標準語化を促進させていると考えられる。それを裏づけられるものとして、アンケートで《別》、《给》、《什么的》、《来着》等の北京語を選択した上海人のほとんどが30代からの若い年齢層の人たちであった。また、北京人へのアンケートで上記の《来着》を除けば、上記の語句を選ばないで他の語句を選んだ北京人のほとんどが30代からの若い年齢層の人たちであった。この年齢層は80年代以後に生まれ成人になった人たちである。また、《来着》を例にとると、筆者は80年代北京に4年(82年~86年)留学していたが、《来着》を上海人が用いていた記憶がない。更にこの語彙は最近出版された『北京话词典』や伊地智氏の『中国語辞典』にも方言として載せている⁵。しかし、中国で98年に出版された『現代汉语虚词词典』には《来着》について詳しく説明をしているが、方言についてはまったく触れられていない。但し、その項目の例文はすべて朱自清、老舍、張天翼、王蒙等の文学作品中の北方人が話しているものからとっているようである⁶。以上のことから《来着》は専門家の中で歴史的な観点から北京語としながらも実際は標準語の中に取り入れられて学校での教育を通して若い世代に標準語と認知され、現代では方言色が薄れつつあるのではないかと考えられる。今後、日本の中国語教科書作成においてもこうしたことも考慮に入れなければならない。ただ、上記のような標準語化が進んでいるものもあれば《这么着》、《准》、《似的》、《咱》等のように方言色をほとんど失っていない語句もあった。こうした標準語化があまり進んでいない語句と進んだ語句の違いが生じる理由については様々なことが考えられ、今後の研究課題にしたいと思う。

付記

今回のアンケートは主にスターバックスで行ったが、これも試行錯誤の結果であった。街頭で行えば、怪しいものと間違われ警察がやってくる可能性もある。また下町にも行っていったみたが、そこでの中国人は忙しくしてとりつくひまもなかった。ところがスターバックスでは時間的に余裕のある人たちがいて、快くアンケートを引き受けていただくことが多かった。そこでアンケートを効率的に多く集めることができる理由から調査場所にスターバックスを選んだ。

また、今回のアンケート調査は私一人では到底できなかつた。2013年度の

一般研究班のメンバーである柴田みゆき、早川智美、清水由香里各先生方と本学の留学生であった湯佳偉さんの協力を得て行うことができた。ここに記してお礼申し上げたい。

注

- 1 下記のアンケート用紙を作成し、今回のアンケートを行った。

语言相关调查问卷

请先选择您的年龄层 () A. 20 ~ 29 B. 30 ~ 39 C. 40 ~ 49 D. 50 ~ 59

故乡: _____。

请在下列选项中, 选出您最常用的词汇。如有选项中没有提到, 欢迎最后一个选项的括号中补充。

1. 我跟你说话呀, 你把那剩那俩啊, 肉包子给她留着, 你 () 吃呀!

别 B. 不要 C. ()

妈妈在女儿房间里

2. 她爱喝牛奶, 我 () 她买了很多牛奶。

帮 B. 给 C. 替 D. ()

3. 凭什么 () 童建业同志敲门, 您就不敲啊!

A. 人家 B. 人 C. ()

回想的时候, 想向对方确认某些事实

4. 你说什么 () ?

你当年爱看的那个电视剧叫什么 () ?

来着 B. 了 C. 不填 D. ()

5. 既然 (), 我就不去了。

A. 这么着的话 B. 这样的话 C. ()

6. 我开心得（ ）。

- A. 不得了 B. 很 C. ()

7. 是他说的（ ）没错。

- A. 肯定 B. 准 C. 绝对 D. ()

8. 口语用法 就像进了天堂（ ）。

- A. 似的 B. 一般 C. 一样 D. ()

9. 他的书包里有课本，笔记本（ ）。

- A. 什么的 B. 等等 C. ()

10. () 不说这个了，换个话题吧。

- A. 咱 B. 我们 C. ()

对您的合作表示衷心的感谢！

2 「北京語の文法特點」に“ここでいう北京語とは北京だけで用いる方言を指し、北方語とは北京を含む長江以北、長江以南の鎮江より上流で九江より下流の沿岸地帯、湖北、四川、雲南、貴州、広西の西北部、湖南の西北一部で用いる方言を指し、北京官話ともいう。南京官話とは江淮方言を指し、主に安徽や江蘇の長江以北の地区と長江以南で鎮江より上流の沿岸地帯などで話される方言のことである。”とある。

3 「裸婚時代」は唐欣恬の小説『裸婚—80后的新結婚時代』をテレビドラマ化したものである。ここで使った中国語文は佳倩の台詞である。場面は佳倩が携帯で彼氏にメールを送った時に母親が突然ノックもしないで部屋に入ってきたので佳倩が怒っているところである。その場面のやりとりの中国語とその日本語訳は下記の通りである。

佳倩: 妈, 你干吗呀? 你怎么不敲门就进来了? 吓死我了。

(佳倩: お母さん、何なの。どうしてノックもしないで入ってくるのよ。びっくりしたわ。)

童妈: 我又不是你爸, 我敲什么呀?

(佳倩の母: 私はあんたのお父さんじゃないし、何がノックよ。)

佳倩: 不是。凭什么人童建业同志敲门, 您就不敲门啊?

(佳倩: ていうか。なんであのお父さんがノックするのにお母さんがノックしないのよ。)

童妈：我是你妈，我就不敲就不敲。怎么着？

(佳倩の母：私はあんたのお母さんよ、私がノックしたくなかったらしないわよ。もんくある？)

- 4 『現代汉语词典』(1978年第1版)には“[来着]lai·zhe 助词。表示曾经发生什么事情。”とあり、その後例文が並べられている。

『現代汉语八百词』の〈来着〉の項目には“[助词]用在句末,表示曾经发生过什么事情,用于口语。句中动词不能带‘了,过’”と説明がり、その後に〈来着〉の例文が並べられている。

- 5 『北京话词典』の〈来着〉には“用于句尾,表示曾经发生过事情。”という説明があり、その後、『紅樓夢』、『兒女英雄傳』、『老舍戏剧全集』第二卷等の文献中からそれぞれ一つの例文を取り出し並べられている。『紅樓夢』は清朝初期の小説で『兒女英雄傳』は清朝後期の小説である。恐らく歴史的な観点から三つの例文を並べられているのだと思う。

『中国語辞典』には“(1)‘来着’は多く北方方言区の話し言葉に用いる。”とある。

- 6 『現代汉语虚词词典』の中の〈来着〉の項目に“动态助词。表示不久前发生过什么事情。句中谓语为单个动词或宾语。动词后不能再有‘了,过’。”とあり、意味を主に三つに分けている。一つ目は単に遠くない過去に起きた事を表す。二つ目は修辭上ですでに遠い過去に起きた事であってもまるで現場で見聞きしてさっき起こったかのごとく表現したい時に使う。三つ目は遠くない過去に起きたことを反問したり問いただしたりする時に使う。

参考資料

「北京語の特點」太田辰夫著 (『久重福三郎先生坂本一郎先生還曆記念中国研究』所収1964年)

「現代北京語に関する調査研究—中国ドラマ「裸婚時代」第一集前半の訳注—」渡部洋 その他との共著 (『文藝論叢』第80号所収 2013年)

『現代汉语词典』商务印书馆 1978年 第一版

『現代汉语八百词』吕叔湘主编 商务印书馆 1980年

『北京话词典』高艾军 傅民编 中華書局 2013年

『中国語辞典』伊地智善繼編 白水社 2002年

『現代汉语虚词词典』侯学超编 北京大学出版社 1998年